

研究・調査報告書

報告書番号	担当
264	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Severity of alcohol-related problems and mortality: results from a 20-year prospective epidemiological community study. 飲酒関連問題の重症度と死亡率： 20年間の前向き地域疫学研究からの結果	
執筆者	
Fichter MM, Quadflieg N, Fischer UC.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Eur Arch Psychiatry Clin Neurosci. 2011 Jun;261(4):293-302.	
キーワード	
精神疫学、アルコール依存症、死亡率、前向き地域縦断研究	
要 旨	
目的： 多量飲酒は死亡リスクを上昇させるというエビデンスがある。しかし、非臨床の地域集団における問題飲酒の長期影響はあまり明らかになっていない。本研究ではこのことに関して、20年以上追跡している農村部地域の代表集団において明らかにする。	
方法： ベースライン調査は1980-1984年で、2001-2004年まで20年間追跡した。専門家の問診と標準化された自己評価スケール (MALT, Munich Alcoholism Test) によって、以下の3群が定義された。(a)高度飲酒問題、(b)中等度飲酒問題、(c)アルコール問題なし。死亡率とハザード比は、いくつかの健康危険因子をロジステック回帰およびCox回帰にて調整して求めた。1465人の地域集団のうち20年間に448人が死亡した。参加率は高かった。	
結果： MALTによるベースラインの飲酒問題者は、高度が1.6%、中等度が4.0%であった。20年間において、高度飲酒問題者は飲酒問題なしに比べて早期死亡のリスクが高かった(2.4倍)。中等度飲酒問題者は飲酒問題なしに比べて有意ではないが死亡リスクが上昇した(1.5倍)。Cox生存分析はロジステック回帰と同様の結果を示した。	
結論： 飲酒問題による個人の死亡リスクを考えるとときには、飲酒問題の重症度を考慮に入れる必要がある。	